

〔緑爽会7月例会〕

暑気払い&講演

恒例の暑気払いと新入会の西谷隆亘会員
(法政大学名誉教授)による

講演「多摩川の魚道」を予定しています。

◆期日 7月25日(木)午後1~4時

◆会費 実費(1000円程度) ◆申込

は前々日迄に松本 ☎fax 03-3326-2892へ

★

8月は夏休み。9月は山行「野猿峠から
七国山」(担当 横山) お楽しみに。

ひとこと 5月の緑爽会総会に続いて、6月15日には日本山岳会総会が開催された。公益法人化されて議事進行も一新。理事候補を一括承認した後、理事会の互選によって会長をはじめ諸担当が決まることになる。だから詳しい人事はわからないままで総会は終わった。いつもながら総会の出席者には年配者が目立ったが、さぞかし戸惑いがあったことだろう。組織が変わっても、根底にクラブ的な信頼関係は変わらずにあってほしいものだ。(総会後の臨時理事会で互選。懇親会の席で発表があった由)。また、会計を一本化できない同好会は、公益社団法人日本山岳会とは無関係な存在だとか。それならそれで同好会は、初心を守って活動したらどうだろう。緑爽会としてなすべきことは、まだあるはずだ。



緑爽会報 NO.119

13年 6月25日

発行

公益社団法人

日本山岳会 緑爽会

☎03-3261-4433

事務局 松本恒廣

夏原寿一 近藤雅幸

近藤 緑 川口章子

渡部温子 福原好子



規約改正によって理事に年齢制限ができたために、若い理事や委員長が誕生することになったことは喜ばしいことだ。今の社会が活性化しないのは、年寄りが長寿になったためだということも聞く。自分ではかねがね立場を譲つたら隠居の精神で生きたいと思つていた。しかし若い人たちに、伝統にも目を向け、会をよりよくするための責務を担って欲しいと願うのは押しつけだろうか。(事務局K)

〔緑爽会6月山行〕

箱根飛龍の滝から湯坂路

私にとつては久方振りの箱根の山行であり、久し振りの小田原であり、箱根湯本であった。先ずは小田原駅の箱根登山鉄道のホームの変わりようにびっくり、車両も見違えるようだ。そして箱根湯本駅に着いて二度びっくり、改札口が二階になっていてバス停までは陸橋になっている。

すっかり衣替えされた駅を後にバス停へ。今日のコース発案者の横山さんが仕事の都合で不参加となり、一行6名、9時15分発の元箱根行のバスに乗り込み15分程で畑宿へ。箱根旧街道への入口を左手に見てそのまま

しばらく直進すると、ご当地の伝統工芸寄木細工で有名な寄木会館を過ぎると右手に「畑宿の夫婦桜」を見る。花時は見事だろう。だから登りはやがて結構な登りだと思ふ頃、飛龍の滝に着く。この近辺で最大の滝と言われるだけになかなかの水量である。しばし小休止、来合わせた外人さん? 3人組に場所を明け渡すと同時にシャッターを押してもらおう。杉、松の林の中に続く山道は歩きにくい丸太の階段状の登り、いつもながらこれには嫌気がさす。

湯坂道入口を過ぎて草繁る丘陵地帯、834mの鷹ノ巣山城跡に着く。秀吉の小田原攻めに備えて北条氏が築城した箱根山諸城の一つ、徳川家康もしばらく滞在したとか。城と言っても小さな砦だったのだろう。展望が良いと聞いていたがさほどでもない。若葉の緑が心地良い。



学生の団体登山に出会う。明治学院の高校生。最初は元気のいい男子、やがて元気のいい女子、体育系かな、そしてフツの女子、その数、250名とか、えんえんと続く。口口に「こんにちは!」にはこちらが降参である。応答するのが煩わしくなってくるのだ。

浅間山で昼食。帰路は鎌倉時代には箱根越えの幹線道路だったという湯坂路を辿る。時折ウグイス、ホトトギスの鳴き声が耳に心地好い。石畳やゴロゴロ石の結構な下り道はしんどい。膝の痛みが再発したようである。やれやれ。

下から廃品回収を呼びかける拡声器の騒音が気分を害することおびたしい。14時30分、国道1号線に飛び出す。湯煙り漂うなかに「入浴休憩」の誘い文句に心を動かされるが、アツと言う間に駅改札口に着いてしまった。

(実施日 2013年6月6日)

〔参加者〕松本恒廣・渡部温子・島田稔・夏原寿一・瀬戸英隆・川口章子

計6名

係 松本/写真 夏原

◆写真上・浅間山にて 右・飛龍の滝にて

自然保護全国集会在立山

自然保護委員長 近藤 雅幸

立山立山。その中腹にある高層温泉、弥陀ヶ原。平安時代から先達、行者、信者によって信仰の対象になっていたこの山も、現在において人間と自然とがせめぎ合う場所になっています。特に立山黒部アルペンルートが開通した後のこのエリアは持続可能な自然環境とは何かという問題を私たちに問いかけてきます。

今回、富山支部六十五周年の事業の一つとして立山山麓で自然保護全国集會を開催する運びとなりましたが、この地には私たちが議論し、考えて行くべき題材がたくさんあります。そういった意味では、今回の自然保護全国集會は開かれるべき場所で開催されることになったといえるのかもしれませんが。立山温泉の時代から始まり、立山黒部アルペンルートの開削。そこから始まるオーバーユースの問題。私たちは今回、自然保護全国集會の二日間で立山の現場に立ち、現状を見て、聞いて、それらに直面することで、これらを深く考えていくことになるでしょう。

一日目はまず支部報告から始まります。短い休憩をはさんで午後2時から、これまで現場で立山の自然に深くかかわってきた立山カルデラ砂防博物館の飯田肇氏による「立山連峰の積雪と氷河」、環境省自然公園指導員の佐藤武彦氏による「弥陀ヶ原自然と歴史の今昔」という二本の基調講演が行われます。地元で長きにわたって研究をされてきたお二人のお話は多分とても興味深いものになるでしょう。その後、4つのテーマに分かれてグループ



討議を行います。ですが、それに先だって立山の自然環境のオーソリティーである鍛冶会員から含蓄のある問題提起がなされることになっています。その話を聞いてから討議に入ることとでそれぞれのグループで話される内容により深みが増すのではないかと期待しています。

翌日は弥陀ヶ原・室堂平・立山博物館と立山カルデラ砂防博物館の3コースに分かれてフィールドスタディに出かけます。弥陀ヶ原と室堂平では湿原や高山の自然と、観光客が多く入るようになってしまったこれらのエリアの現状がどうなっているのか。一方、博物館では古くからの立山の自然と人間とのかわりを信仰登山や自然災害との関係で考えることができるはず。いずれのコースでも前日の討議で語り合った内容を実際の現場で確認し、さらに理解を深めることができるでしょう。

自然保護全国集會は全国で自然保護活動に携わっている日本山岳会会員たちが一堂に会する唯一の機会です。一年に一回、日本全国の会員が一緒に勉強し、議論し、情報交換を行うことで、それぞれが自然保護について考えを深める。そして、地元に戻った会員はそれをベースに地域に密着した自然保護活動を行うことになるのです。

日本山岳会で行う山岳環境保全事業には森づくりなどの緑化事業や自然観察会や森林体験学校などの啓もう活動などさまざまなもの

中島はるさん 有難う

劇団芸協さんにも感謝をこめて

6月13日は梅雨らしい日だった。杖を使うようになってから、傘をさす雨天の外出は苦手だったが、その日だけは何かあっても出かけるつもりだった。

この2月に亡くなった作曲家の中島はるさんを偲ぶ音楽祭がめぐるパーシモンホールで開催されることになっていた。

中島はるさんのことを覚えていてくださるだろうか。自然保護全国集會にもよく参加して音楽で花を添えてくださった。2007年西湖で開催された時には「三つの地球の歌」をもって参加。集會目的にそって地球環境を守る組曲を東京インターアーツのメンバーと共に演奏してくださった。その時、誰もが歌えるようなものもと易しい歌が欲しいと言ったのがきっかけで、「地球をこわさないで」(作詞 峯陽)ができて、さらに歌いやすくした「みんなで守ろう」が生まれた。不謹慎にも山岳会の酒豪は「みんなで飲もう」と替え歌にして歌ったりもした。

2010年、霞ヶ浦でアフタースタディを開催したときに虫めづる姫君である先生に「芥川龍之介『蜘蛛の糸』における蜘蛛学的考察」を依頼したところ、「面白そうね」と快諾。自らが所属する「日本蜘蛛学会」仕込みの博識で作品がありすが、いわばそのすべてのベースになるのが自然保護全国集會なのではないかと私は考えています。

今回の自然保護全国集會では立山と弥陀ヶ原というとても素晴らしい題材が与えられています。そういった機会を与えてくれた富山支部に感謝するとともに、そこで行われる全国集會という場から何が得られるか、今から楽しみにしています。(問合せ080-6629-4630)

に登場する蜘蛛の種類を見事に解説してください。帰京後まもなく癌が見つかったが、抗癌剤治療をせずに最後まで仕事をやる道を選んだ。その作品は日本の古典歌謡、北原白秋・中原中也の詩から、昆虫記から、そして最後の仕事は「やさしい般若心経」だった。偲ぶ会には歌手も伴奏も一流の人たちが、はる先生のために一曲ずつ心をこめて歌った。その中に私たちのために作曲された「地球をこわさないで」もあった。西湖の集會のときと同じ斎藤恭子さんが歌ってくれた。自然が大好きな、人間として純粋な人だった。古希を迎えたばかり、妹に先立たれた気がする。



作曲された「地球をこわさないで」もあった。西湖の集會のときと同じ斎藤恭子さんが歌ってくれた。自然が大好きな、人間として純粋な人だった。古希を迎えたばかり、妹に先立たれた気がする。

同じころ劇団芸協から解散するという挨拶状が届いた。劇団の創立者あずさ欣平さんはじめ田中和実さん青野武さんと長いこと一緒に旅をしたが、座の中心的な人たちが亡くなり、田中亮一さんも断腸の思いで解散を決めたのだろう。いろいろと無理難題を聞いてもらい、行く先々の集會で楽しい夢を見せてもらったことに感謝している。そう言えばいつか訪れた立山のカルデラ砂防博物館で聞いたことのある声が流れてきた。展示室の映像で安政の大地震のナレーターをしていたのが青野さんだった。今もあの声のままだろうか。先に逝った皆さん、また逢う日までさようなら。(蜂谷 緑)

編集後記 最近山梨で過ごすことが多くなっていて、会報編集に時間がかけられず申し訳ない。★羽賀克己さんから届いた短歌の続編も裏面が用意出来ず、次号掲載とした。原稿は早めに入れていただけると助かります。★梅雨本番、どうかご自愛ください。では、暑氣払いでまた。(K)